

## SA3

### 若手研究者の会 キャリアプラストーク

座長：鍋加 浩明

(愛媛大・院医・解剖学・発生学)

日本解剖学会若手研究者の会が設立され1年が経ちました。夏の学校に続く若手研究者の会企画として、様々な職種の解剖若手研究者に協力して頂きキャリアプラストーク(研究内容、教育経験、目指すポジション等を含めた発表)をお送り致します。学部学生、大学院生、若手研究者のみならず、解剖学会の将来を担う若手スタッフに興味のあるシニアの先生方も是非ご参加下さい。

(COI：無し)

### 1SA3-2

#### 大脳皮質形成メカニズムの研究と解剖学

○廣田 ゆき

慶應大・医・解剖

2011年より解剖学教室に非医師の教員として所属し、医学部の肉眼解剖学、神経解剖学、発生学の教育に携わっている。私は理学部生物学科出身であり、大学院ではショウジョウバエを用いた神経発生の研究、ポスドクから哺乳類中枢神経系の発生・再生メカニズムの研究を行い、現在は主に大脳皮質発生の制御機構を研究テーマとしている。解剖学関係の教育業務を始める際には所属教室の先生方から助言を頂きながら、約一年の準備期間をかけて解剖学を学んだ。解剖学において必要となる生体の構造をつぶさに観察する作業は、形態形成を基盤とする発生の研究においても役に立つと感じている。現在は任期付きの講師として、就職先を探しながら教育と研究を行っている。本発表では、これまでの現在の研究内容と合わせて、これまでの教育と研究の経験について紹介したい。

(COI：無し)

### 1SA3-1

#### 箱から始まったヒトの形態学

○権田 裕子

東京医大・組織神経解剖

薬学部の学生時代、人工皮膚とエレクトロポレーション法を用いた経皮の薬物動態学研究の道に入る。その後、大学院修士課程で病院薬剤部の研究室に所属し、臨床における薬物動態学の研究を始める。消化器外科・小児外科からなる生体肝移植チームとの移植医療における新しい免疫抑制療法の開発、また呼吸器・循環器内科との遺伝子診断を用いた抗凝固薬の個別投与設計の研究に携わる。博士課程進学にあたり研究分野を一新し、医学部解剖学教室の門をたたき、神経発生研究の道へ。大脳皮質発生の研究を始め、学位取得後も国立精神・神経センター 神経研究所、理化学研究所 発生・再生科学総合研究センター(神戸)でも継続して行い、東京医科大学 組織・神経解剖学分野に移動後から海馬発生の研究を開始し、現在に至る。

(COI：無し)

### 1SA3-3

#### 卒後初期臨床研修必修化とその前後における医療界の情勢

○灰塚 嘉典

杏林大・医・解剖

戦後の医師の臨床研修の歴史は1946年に制定されたインターン制度とよばれた実地修練制度に始まる。これは現在の臨床研修制度とは異なり、卒業後国家試験受験資格を得るために卒業後1年以上の診療および公衆に関する実地修練を行うというものであった。この制度の問題点として無資格の者が診療を行う点があげられた。さらに無給かつ過酷であったため東大医学部のインターン生が中心となり1967年に医師国家試験受験拒否闘争という東大紛争の引き金ともなる運動を起こした。結果、実地修練制度は1968年に廃止され、新たに臨床研修制度が導入された。この臨床研修制度は医師免許取得後2年以上の臨床研修を行うことが定められていた。しかしこれは努力目標であったため、研修対象者の10%台の者が受けていなかった。研修を受けた者も大多数が地域医療に関与せず、4割の者は単一の診療科のみの専門医志向の研修であり、総合診療方式の研修を受けた者はごく少数であった。手当に関しては支給されるように改善されたものの名目および支給額は不明確であり、研修医の生活は相変わらず不安定であった。そこで2004年に新卒者全てが地域医療を含めた7科目を必修とする初期臨床研修が義務化され、研修手当も保障された。必修化および当時の医療界をめぐる情勢が研修医に与えた影響を自らの経験も踏まえ紹介する。

(COI：無し)

**1SA3-4****解剖学講座における技術職員の展望  
ー現状と今後についてー**○佐々木 健<sup>1,2</sup>、蓑島 伸生<sup>2,3</sup>、佐藤 康二<sup>1</sup><sup>1</sup>浜松医大・器官組織解剖、<sup>2</sup>浜松医大・技術部、<sup>3</sup>浜松医大・光先端医学教育研究センター

国公立大学の主に理科系講座においては、古くは教育研究業務を支援する講座専任の技官(法人化に伴い技術職員に変更)が配置されていた。その後、業務の効率化や人員整理を図る目的で、講座専任の技官は順次廃止・集約化(技術部化、センター化)され、現在では医学部・歯学部を中心に、一部の講座に配置されているのみである。このような状況においても、解剖学講座では献体や解剖関連業務といった職務の特殊性・専門性から、講座専任の技術職員の継続配置が見込まれている。

一方で、国立大学やその各講座は、交付金の削減・傾斜配分、研究費の減少、教育研究に携わる人材の不足化というような問題に直面しており、講座所属の技術職員も教育研究や資金獲得の実働戦力として機能することが(今後)求められてもおかしくない。

以上のような背景から、自身の解剖学講座における15年超の経験をもとに、解剖学講座における技術職員の役割や位置付け、そしてその展望や問題点などについて発表する予定である。そして本発表が、今後の解剖学講座や解剖学会を担う若手の先生方への講座における技術職員の役割や位置付けのヒントになり、また、学生やポスドクには技術職員も職の選択肢の一つとして考えてもらえれば幸いである。

(COI: 無し)

**1SA3-6****神経解剖研究と解剖実習教育の経験**

○大筆 友博

九州大・院医・神経解剖学

九州大学では10月より肉眼解剖実習・脳実習がスタートし、解剖学分野の教員が教育・実習に携わる時間が増加する。反対に研究に費やせる時間は相対的に限られるようになる。こうした中で、我々は複数のプロジェクトを同時並行的に進行することで、効率的に研究を推進する努力をしてきた。この発表では、その取り組みの具体的な方法について紹介する予定である。また研究の詳細な内容として、最近ではてんかんや統合失調症などの精神症状を併発する疾患モデル動物を用いて、組織学的・解剖学的・生化学的実験を組み合わせた集学的研究を行っているので、その一端を紹介する。

(COI: 無し)

**1SA3-5****内科学から見た、死後Aiを用いた解剖学**

○小川 典子

島大・医・解剖

尊いご遺志により医学教育・研究のためご献体いただいたご遺体を、最大限に活かせるよう、当解剖学講座では、2011年からご遺体引き取り時に、附属病院に設置されたAutopsy imaging (Ai死亡時画像診断)センターのCTを用いて固定液注入前の全身のCT画像を撮影している。その画像データを、解剖学実習時に使用する班ごとのiPadに入力し、実際に解剖をしながら、担当するご遺体の二次元画像を確認できるようにしている。

近年、臨床では画像診断が格段に進歩し、診療において画像に接する機会が年々多くなっている。二次元で描出された臓器の断面が、実際の三次元の臓器のどの部分に当たるかを理解していることが診断の基本となるが、解剖学と臨床診断学は別々に異なる学年で講義が行われるため、三次元の臓器と二次元画像を結び付けて理解する機会は十分ではなかった。当学では、実習開始前に放射線医学講座教授がCTの一般的な読影を説明し、個々の担当症例について実習中に教員が班ごとに解説して、解剖学の応用編として、三次元と二次元における知識の統合に努めている。

今回、いくつかの臓器において、CTやエコー、内視鏡ではどのように見え、内科診断に必要な解剖学的知識にはどのようなものがあるのかを紹介したい。

(COI: 無し)

**SA4****男女共同参画****アカデミックキャリアと多様性の  
尊重ー研究室のタイムマネジメント  
向上ー**

座長: 松崎 利行

(群大・医・生体構造)

城戸 瑞穂

(佐賀大・医・生体構造機能)

教育・研究や医療現場にて、属性にかかわらずそれぞれの力を発揮することが望まれている。その一方で、固定的な男女の役割分担意識、複雑で時間のかかる業務に伴う長時間の働き方など課題は根強い。本シンポジウムでは、女性研究者の支援に長年取り組んでいらっしゃる伊東昌子先生に、研究室での時間管理力向上についてご講演をいただく。楽しみながら教育・研究を実現する方法について考える機会となることを期待する。また、委員長より、第4回男女共同参画の大規模アンケート解析結果について、解剖学独自の視点から紹介する予定である。